

美術の窓(59)

宗達、光琳の「風神、雷神」と

ローマの平和祭壇の浮彫の「空気」と「水」(つづき)

大和文華館館長 吉川 逸 治

ところで、「風神、雷神」は、中国ですっかり中国化された力士の姿をし、風袋や小太鼓を連ねた持物を持ち、いかにも東アジアの米作地帯に適しい、五穀豊穡を祈る民族的信仰にこたへて、産み出された姿をしてゐる。宗達は、この屏風を描くにあたって、三十三間堂の裏廊下に置かれている鎌倉時代の木彫像の風神、雷神にヒントをえてゐるらしいといふ。とにかく、仏教像の外縁部におかれた風神、雷神は、わが国では大黒様のやうな楽天的な諧謔をまじへた姿で人々に親しまれ、恐ろしい雷電の神、暴風の神といった観念とは程とほい。しかし、すでに松本栄一博士は、昭和4年11月号の『国華』誌上の、「東洋古美術」にあらはれた風神雷神」といふ論文で、漢代の画像石に刻まれた「風公」「雷公」のすこぶるユーモラスで、車や雲などのおぼげさな仕立てをもった特殊な図像を示され、次いでわが風神雷神の図像の系譜に直接に連なる仏教関係の諸例に言及し、力士姿に中国化される以前の例を中央アジアのキジル、シムシム、パーミヤーンの仏画遺例でたどられ、これらの画像が古代ギリシア



・ローマの先例に発するものであることを説かれてゐる。そこには、画像上にこれらギリシア・ローマの特殊な癖があらはれてゐる。

古典古代の古典美術の特徴は、人間形態中心主義であつて、神々とか善、悪、信、偽など人間の諸理念を理想的な人体像で表現するといふだけではなく、特定の山、河、土地、海、都市を人体像で表はすとか、さらに朝夕昼夜などの時間、季節、方角、風あるひは土、水、火、気など諸要素といったものを人体像でどしどし表はすといふ擬人法をさかんに用ゐた。明瞭な人間の姿を用ゐて、神々や精霊の世界を人間化し、また諸観念の世界を明瞭に提示する方法で、自然界も人間に親しいものと化す。だから、古代ギリシア・ローマ時代の風景を示す場面では、山には山の男神の姿、泉には泉の精の女性が描き添へられる。風といへば、アテネの町に今日でも建つてゐる古代ローマ時代の「風塔」(写真)には、八角形の建物の高い石壁に八方の「風」を象徴した人体像が、飛翔する姿で刻まれてゐる。アモールのやうに翼をつけ、また、前垂れのやうな衣布に花などいれて



平和の祭壇の浮彫の一部「空気」「大地」「水」ローマ・アウクトゥス皇帝廟彫らませる「花の精」の姿にも近い。このやうな「風の精」の姿が後に中世の西洋のミニアチュールにも伝へられてゐるから、広く行なはれてゐたタイプの一つを示すものにさうもない。

ところで、中央アジアの仏画から宗達の屏風までにいたる風神、雷神について、想ひあはされるのは、この風塔の「風の精」の姿ではなく、むしろローマのアウグストゥス皇帝の有名な「平和の祭壇」(写真)の美しい浮彫装飾の一つをなしてゐた「大地」の擬人像とその両側に添へられてゐる「空気」と「水」の擬人像である。「大地」は岩座に坐つて、両腕に子供をかかへて養ふ若い母親の姿として表はされ、足もとには牛が添へられ、豊饒とか繁殖の意味を加へられてゐる。彼女の左右には、怪魚の上ののつた「水」の精と、白鳥の背ののつた「空気」の精とが、やはり美しい女性の姿としてあらはされ、彼女らは頭の上に同じやうにアーチ形に風をはらんで、ふくらんでゐるヴェールの両端を両手で握つてゐる。このやうに頭上に布を張りわたらせる姿の女性像は、自然現象の擬人像にしばしば用ゐられたやうで、後に、中期ビザンティン美術の古代古典様式の復興を試みる時代のミニアチュールの

なかにも、古典古代の例を模写したのであらうか、「暁」の象徴像として、「イスラエル人紅海渡渉」などの場面に描き添へられてゐる。この種の優美な女性像が、仏教画像のなかでは、中性化され、風袋は松本栄一博士の考証によれば中央アジア起源で、それが中国へ伝達されたとされてゐる。「雷神」についても、基本形は「風神」と同じであつて、持物がちがふにすぎない。「雷神」が根本的に別な、自分だけの姿をもつてないといふのも特徴的である。雷を握つた最高神であるユピテルとか、インドラといふ意味ではなく、自然現象の一つを示す「精」として取扱はれ、風神と対となつてゐるのである。

それにしても、ゼウスやユピテルの像はあるが、これに対するインドラの像はガンダーラで始めて作られると云ふのも注目すべき点で、とにかくすべて人間を中心に考へる古典文化の人間形態中心主義が、意外な形でわれわれの親しい生活伝統のなかまで入りこんでゐるのに驚く。(完)

[初出『學鏡』1966年12月号、丸善刊。吉川逸治著『ロマネスク美術を求めて』昭和54年、美術出版社刊]

季刊 美のたより No.115

平成8年5月23日

発行 大和文華館